

# 蔡の祈禱所

## 紀伊徳川家と高尾山

明治大学博物館

外山

徹

### 八代藩主重倫の書状

法政大学が刊行した薬王院文書の目録には三〇四点の紀州家関係史料が収録されているが、その中でも、ひときわ目を惹くのが八代藩主重倫からの書状である。

#### 重倫の書状

まずはその内容をつぶさに見てみたい。最初に写真を掲載した部分について、解説した文字をそのまま並べてみる。対照して見ていただければと思う。

拙者儀当夏  
之比后病氣二  
有之候所今以  
相替儀無之難  
儀致候全快可  
致病氣二候哉又  
者死症二て候哉  
被相考可給候

是者拙者自筆  
当年廿六歳  
出生丙寅之  
年二月廿八日  
「紀伊中納言公より湛玄  
比丘江賜書翰御自筆」

とある。末尾にある生年は八代藩主重倫のものであり、その前段には「是は拙者自筆にてこれありそうろう」とあるので、重倫自身が筆を執ったということになる。湛玄は十六世山主秀憲の隠居名である。まず印象的なのは、通常見かける文書とは体裁が異なる点だ。まず字が大きい。一行あたり五〜八文字というような紙の使い方は通常見かけない。紙質もたいへん上質である。くずし字にはなっているが「二字」が区切られ、公用書体である青蓮院流とも印象が異なる。通常、藩主の名で発給される文書は、当然ながら右筆が書くものなのでその体裁には定型がある。この文面は、それとはまるで印象が異なる。このことから、まずは重倫直筆とみなしてよいのではないかと書は人なりと言いが、何となく殿様の直筆という雰囲気は伝わってくる。

取ってみる。  
拙者(私)はこの夏の頃より病氣であり、今もつて相変わらずで難儀しています。全快する病氣なのでしようか、または死症なのでしようか、考えてくださいませんか。一通りの(普通の)病人は死症と承れば甚だ氣にかけ、隠居などするのでしょうか、拙者はそうではなく、近頃は甚だ仏法に帰依しているので、そうそう氣にかけるとはありませぬ。全快と承ればますます養生し、病死と承ればますます仏法三昧に入らうと存じますゆえ、このように承りたく存じます。何とぞ、遠慮なくお申し聞かせください。以上

六才とすればこの書状は明和八年(七七二)九月のものということになる。旧暦なのでまだ夏の暑い盛りであっただろう。「南紀徳川史」によると、この年は国許から江戸へ参勤する年であったが、風邪を理由に二月末日の立立を延期していた。そして、五月八日の上野寛永寺参詣は、病氣を理由に取り止めている。翌九年二月にも病氣を理由に江戸城登城を取り止めており、「南紀徳川史」はその理由を「去年八月より御癩氣にて」と記す。「癩氣」とは強い差し込みすなわち腹痛のことと、それだけでは具体的な病名は不明であるが、症状が開始してしばらく劇的な悪化が認められないことからすると、書状にある「死症」という程のものではないようだ。

拙者儀当夏  
之比后病氣  
有之候所今以  
相替儀無之難  
儀致候全快可  
致病氣二候哉又  
者死症二て候哉  
被相考可給候

佛法三昧に  
入らば  
死に  
怖れ  
無  
く  
な  
る  
べ  
し  
と  
思  
ふ  
は  
佛  
法  
三  
昧  
に  
入  
ら  
ば  
死  
に  
怖  
れ  
無  
く  
な  
る  
べ  
し  
と  
思  
ふ  
は

出生丙寅  
二月廿八日

なのか、死に至るものなのか尋ねるシンプルな内容である。変わった点と言えば、普通の病人なら死ぬ病と知れば甚だ氣にかけるが、自分は仏法に帰依しているのです。そのようなことは無いと述べている辺りか。通常、大名の当主からこのような問いを寄せ

られては、どのように答えてよいものやら判断に迷うところだろうが、重倫がどちらの答えであったもうろたえるものではないと言いつつ、湛玄に対する配慮もある。そして、その理由を仏法への帰依として、たとえ死に至るとしても、仏法三昧に明け暮れると

いう心境を語っている。特に行頭に記した二か所の「佛(仏)法」の大きな文字が印象的である。死ぬか生きるかどちらでもよいというのであれば、わざわざ訊くまでも無いようなものだが、それはそれで自らの行く末は氣になるであろう。全快と聞いても「いよいよ

よ養生いたし」とする慎重な姿勢と、深い仏法への帰依が感じられる文面からは、謙虚で穏やかな性格を感じさせる。やや氣になるのは、別紙として添えられた短い文面の文言である。不養生よりの病氣そうろうや、または因縁にてそうろうや、つ

ぶさに申し聞かされたまうべくそうろう。重倫が自らの病氣を「因縁」によるものかと疑っている点が少々氣にされる。些細なことかもしれないが、この点で、病氣が単なる身体の不調ではなく、何か精神を病む傾向にあることを感じさせるのである。藩主が一僧侶にこのような直筆の書面を送り、問いを発すること自体異例なことであろう。実は、重倫はこの書面から感じられるような人物像とは全くかけ離れた評伝の持ち主なのである。

「仏法」の文字がひときわ目立つ雄渾な筆致

おことわり 本連載では史料の引用について、読みやすく原文に手を加えています。